

# キネマの神様

키네마의 신 | God of Cinema

KOREA4  
KO-Production in Tokyo 2016

## 作品概要

監督:キムソンズ | プロデューサー:ユンミニョン | 製作会社:Movie engine | シナリオ:原作脚色 | 作品区分:実写劇映画 | ジャンル:ヒューマンドラマ  
製作形式:デジタル | 使用言語:日本語 | 撮影予定日:2017.04. | 直接製作費(KRW):3,500,000,000 | 確保済み製作費(KRW):500,000,000  
共同製作 希望形態:共同製作、資金調達、配給 | シナリオ:1稿 | プロジェクト 推進経過:原作「キネマの神様」著作権確保

### シノプシス:

キャンブルと映画に全てを費やし家庭をないがしろにしてきたマンションの管理人の父親。そんな父に頭を痛めながらも彼の幸せを願うハイミスの娘。  
二人の共通点は映画を愛するということ。

大企業の課長として勤めていたアラフォーの歩が会社に辞表を出して失業者になる。結婚もせずバリのキャリアウーマンとして働いてきたが、陰謀にはまり、そのまま押し流されるようにして退社した彼女は人生が虚しくなる。娘を誇りに思い家族のために犠牲を払い続けてきた母親に失業者になったことをどうやって話そう…  
娘の給料をあてにしてキャンブルがやめられず、借金だらけの上に心臓麻痺で倒れて入院した父、円山をこれからどうしたら良いのだろう…歩は頭を抱えるばかりだ。  
再就職先を探してみるが、年齢と前職場でのキャリアが足を引っ張る。ガックリと力を落とし公園を歩いていく歩は眩い太陽の光と満開の桜を見上げながら考える — 春はいつ訪れるのだろうか…

“暖かい春の季節に人生で最も寒い冬のような日々を迎えた私の家族。でも、春はやってきた…”ニューシネマパラダイスと共に!

歩に春を運んでくれたのは他でもない映画だった。  
円山が病院に入院している間、父の代わりにマンションの管理人を引き受けた歩は、偶然、父の古びた映画鑑賞ノートを見つける。  
父の人生においてキャンブルより大切なのは映画だった!  
特に文才があるわけではないが、映画を愛する円山の思いが込められた感想の数々。  
歩は父に返信するように、映画ニューシネマパラダイスの感想をノートに書き込む。  
数日後、歩に廃刊直前の映画雑誌社から電話が掛かってくる。  
「うちの雑誌で文章を書いてみませんか。」  
父円山が彼女に許可も得ず、彼女の感想文を映画雑誌「映友」のサイトに投稿したのだった。

“家族とは名ばかりで理解することができなかった父、でも私たちは映画を通じて真の家族になった!”

映画雑誌社に就職した歩は父のキャンブル中毒を治療する為に雑誌社のサイトで映画の感想を書いてみないかと円山に提案する。  
「キネマの神様」というブログに投稿された円山の感想文は徐々に人々の心を動かして多くの人々が読むようになり、やがて英語の翻訳版も作られ、アメリカでも熱い反応を呼び起こし、つぶれそうだった雑誌社は起死回生の機会を得る。  
「キネマの神様」とは、幼い頃円山が、観たいだけ映画が観れるようにと願って即興で作り出した神様であるが、いつしか神様は皆の心に宿り始め、思いがけない奇跡を生み出す。

“失った夢を取り戻すために、壊れた関係を修復するために、私たちは劇場に向かう!”

老年に生きることへの自信を取り戻し、キャンブル中毒を治して娘の歩との関係も回復した円山はつぶれる寸前だった行きつけの映画館、名画座を守ろうと必死になる。  
そんな折「ローズパッド」と名乗るアメリカ人のブロガーが現われて円山の感想を猛烈に批判するコメントを投稿しはじめ、皆、危機に追い込まれていくのだが…  
ローズパッドとは一体誰なのか?  
彼はなぜ円山を挑発するのか?  
歩と家族、そして個性溢れる雑誌社の職員たちは円山とローズパッドの評論対決を見守りながらある瞬間、自分の内面と向き合うことになり、泣いたり笑ったりしながら心が治癒されるという奇跡のような体験をすることになる。  
結局、彼らは失った夢と情熱を取り戻し、家族と劇場を守ることができるのだろうか?  
皆が夢に見た映画の真の価値が姿を現し、映画のように光り輝く瞬間が彼らの目の前に繰り広げられる…

### 製作計画書:

1. 作品の企画意図及び製作の方向性

#### A. 中年層・壮年層のための映画。

老年の主人公や旧世代にアピールする思い出の映画の引用や失われた価値を守り、家族関係を回復するといったテーマなど、中壮年やシルバー層の絶対的共感を得るコンテンツ。

#### B. 様々な社会性を反映した映画。

高齢化する親の世代との葛藤や距離感、シネマコンプレックス(複合映画館)の市場独占と昔ながらの劇場の閉館が相次ぐ映画界、インターネットの影響で専門雑誌の存続が難しくなった現代メディアの断面等、私たちにとって身近な「映画」を通じて様々な問題を解決するドラマであり、映画を愛する人々は勿論、時代と世代を越えた幅広い層の共感を得る。

#### C. 誰もが共感できる普遍性のある映画。

救いようのない父親と無職の娘が映画を通じて再起するサクセスストーリー。  
親子の葛藤を解決し関係を回復する家族映画。  
映画が好きで集まった人々の成長を暖かな視線で描いたヒューマンドラマ。  
コミカルな要素と好奇心をそそる内容や反転を繰り返す劇的なストーリーラインで、日本や韓国だけでなく世界の共感を得るに充分な興行的成功要素を備えている。

#### D. 映画を素材にした映画。

お互い理解し合えなかった人々が、映画が好きという共通点を通じて互いを応援するようになり、目の前に立ちふさがる難関を突破していく。窮地に追い込まれた人々が映画を通じて再び生きる力と勇気を与えられる過程を描く。  
映画好きの人々にはこれ以上無い幸福感が得られる映画であり、長い間映画を愛してきた人々には是非勤めたいと思う映画になるだろう。

#### E. 新しいアジア映画。

日本の素晴らしい原作をもとに韓国で企画開発及び制作に積極的に参与する方向性である。  
アジア市場で普遍的共感を得ることが可能なドラマであり、両国の映画スタッフの優れた制作能力を発揮してより国際的競争力を備えた「アジア映画」の制作を目標とする。

2. 資金調達の現況と計画

GBポス্টン創業投資の初期投資・支援確定。グローバル投資ファンドと接触中。

3. キャスティング及びスタッフの構成

キャストは日本。スタッフは韓日共同構成。  
プリプロダクション・スタッフとポストプロダクション・スタッフは韓国。

4. 国内外の配給計画

2017年、日韓両国での公開を目標とする。

## 製作陣情報



キム・ソンス

所属 : Movie Engine

職位 : 監督

住所 :

Apt# 302, Seojeong-dong 1105-3,  
Pyeongtaek-shi, Gyeonggi-do,  
South Korea

連絡先 :

Tel: +82-31-666-7349

Mobile: +82-10-8899-7349

Email: abelperara@hanmail.net

### Movie Engine

住所 :

Dokseodangro 187, 3rd floor #310,  
Seongdong-gu, Seoul (Oksu-dong,  
Oksu-dong Keukdong Mall), South Korea

連絡先 :

Tel: +82-2-6339-3940

Email: boost.o.jump@gmail.com

### 氏名 : キム・ソンス (海外行事参加者)

作品経歴 : 2006年“美しき野獣-ある天才科学者の五日間 (Running Wild)” 監督, 脚本  
2014年“ゲノム・ハザード ある天才科学者の5日間 (Genome Hazard)” 監督, 脚本  
(2011 Ko-production in Tokyo 出品作)

### プロデューサー : ユン・ミニョン (海外行事参加者)

作品経歴 : 2006年~2010年 日本東宝映画 制作企画部勤務  
“地下鉄に乗って” ラインプロデューサー  
“ゼロの焦点” “そのときは彼によろしく”等  
多数の東宝制作配給作品に参加。

KBSドラマ“逃亡者PLAN B” 日本ロケラインプロデューサー  
韓日合作映画“Brake Mode”プロデューサー  
東宝映画“I am a Hero” 韓国ロケAP

### 作家 : キム・ソンス

作品経歴 : 2006年“美しき野獣 (Running Wild)” 監督  
2014年“ゲノム・ハザード - ある天才科学者の五日間 (Genome Hazard)” 監督  
(2011 Ko-production in Tokyo 出品作)

### 製作会社 : Movie engine

作品経歴 : 2014年“Speed”制作 “野の花- Wild Flowers”制作

### 参加にあたってのコメント (その他)

2011年に参加した国際共同制作-企画開発支援事業に選定され、Ko-production in Tokyo を通じて「ゲノム・ハザード - ある天才科学者の五日間」制作の機会を得た経験があります。「ゲノム・ハザード」を制作しながら韓日合作映画の制作に魅力を感じ自信も得て、その時のプロダクション・ノウハウをより発展させた形で発揮したいと思い、再び志願しました。

2016年 Ko-production in Tokyo を通じて再度韓日両国で公開できる良い作品を披露したいと思えます。韓日国際共同製作においては誰よりも優れた経験と自信、そしてノウハウを持っていると自負します。どうかよろしく願い致します。